

シチュエーション：留学中

ケース② ビッグ・シック ぼくたちの大いなる目ざめ (2017)¹

プロローグ

「とにかく、もうあいつとは無理です」。そう言い放つ滋の言葉には、有無を言わせぬ響きがあった。京子は途方に暮れた。

まったく、私は心理カウンセラーじゃないんだから。そもそも、滋だって子供じゃあるまいし、これくらいの揉め事は本来なら自分で解決すべきなのに……。

「だって、お金払ってるじゃないですか。30 万円ですよ！ だったら後はプログラムがうまく行くよう、フォローするのが京子姉さんの仕事じゃないですか」。そう、確かに私は仕事でここに来ている。大学の業務として学生を引率しているのだ。だからと言って、学生をお客さん扱いして良いものか？ 旅行会社のツアーコンダクターとは違うのだ。

カリフォルニアの青い空

京子にとって、海外での学生の引率は決して初めてではない。今の大学で新卒の職員となってもうすぐ7年。ベテランと呼ばれるのはまだまだ面映ゆいけれど、右も左もわからぬ新人ではない。それは確かだ。

かと言って、彼女自身に豊富な海外経験があるわけではない。留学だってしたことがない。ただ、大学が英文科だったため、それなりに英語は喋れる。そこを見込まれたのだろう、今回が確か4回目の引率だ。

場所はアメリカのカリフォルニア州。計16人の日本人学生たちが、現地IT産業の発展ぶりを見学し、併せて受け入れ先の州立大学で10日間の英語コースを受講する。要は多くの大学が提供している、典型的な超短期留学プログラムだ。

毎度のことだが、参加する学生たちは学年こそ違えど皆学部生ばかり。20代後半の自分とは年齢が近く、彼らとは殆ど友達感覚で過ごせる。頼られるというよりは、慕われるという感じ。今回も、誰が言い出したか、京子姉さんなどと呼ばれちょっと良い気になっている。

また、引率と言っても、授業や視察先の解説は現地の州立大学の職員が担当してくれているので、自分の出番は余りない。学生たちに必要な事務連絡をして、異国でのちょっとした話し相手になるくらいだ。加州の空はあくまでも青い。ああ、最後まで何も無いといいなあ。京子はひたすらそう願っていた。

小さな揉め事

現地に来て5日が経った頃。京子はある噂を耳にした。寮の隣の部屋で、昨夜、学生同士が怒鳴り合っていたというのだ。さては喧嘩だろうか。教えてくれた学生も又聞きのようなのだ。

今回の留学では、参加した日本人学生に州立大学の学生寮が提供されている。夏休みで誰もいないということから、かなりリーズナブルな価格設定になっているのが魅力だ。強いて悪いことを挙げれば、その寮では全ての部屋が二人以上の相部屋になっているということだろう。

現代の日本では個室で育った若者が多いので、たとえ短期間といえども他人との共同生活はストレスに違いない。その意味では、同居者との揉め事というのは想定範囲内でもあり、どこの大学でもよくある話である。そのため、京子は噂を特に問題とも思わず、その件について学生から詳しく聞き取りをするなどの行動は取らなかった。けれども、そのことが後に尾を引くこととなる。

¹ 本ケースは首都圏の私立大学に勤務するある事務職員（留学担当）から聞き取った話をもとに著者が創作した

トラブルへと発展

こちらに来てから、京子は朝の散歩を日課にしている。空気の乾いたカリフォルニアでは、朝の涼しさがとても気持ちいいからだ。散歩の後、参加学生の一人である滋から話があると言われたのは、噂を聞いた2日後のことだった。

「もう無理です。やっていけません」

「どうしたの？」

「同じ部屋の大成と喧嘩しちゃって。もう、頭に来るんです」

「……」

「あいつ、他人のことなんか全然考えないんですよ。こっちは勉強してるってのに音が煩くて。音楽の聴き方から、PCの打鍵音から、電話の会話から、もう気になって気になって」

「座を外すとか出来ないの？」

「どうして僕だけが一方的に配慮しないといけないんですか。部屋代は僕だって払ってるじゃないですか。それにあいつ、毎日何時間も人と喋ってて」

「電話？」

「多分、スカイプです。日本の家族とか、彼女とか。もう、毎日ずっとです。昼も夜も」

「部屋を出て話せとか、回数を減らせとか交渉してみたら？」

「やりましたよ、交渉。でも、いつも『なんで？』って言われて終わりです。昨日はついに大喧嘩してしまっ

「困ったわねえ……。交渉の余地なしって感じ？」

「こっちから頼むってのがそもそも嫌です。悪いのは向こうなのに。とにかく、もうあいつとは無理です」

滋は駄々っ子のようにそう言い放ち、すぐにでも部屋を変えてくれるよう京子に要望した。ちゃんとお金を払ってるんだから、コーディネーターとして京子が責任を持って何とかしてくれとも。京子は言葉に詰まった。

大成の言い分

部屋の変更が可能かどうかを考える前に、京子は相手の大成にも事情を聞いてみようと声をかけた。

「大成君、ちょっといい？」

「はい、何でしょうか」

「さっき、同じ部屋の滋君が大成君とは別の部屋にして欲しいって言って来ただけど、心当たりある？」

「ああ……。昨夜の喧嘩でしょう。激しかったからなあ」

「滋君によると、大成君が煩いって言うんだけど」

「生活音だと思うんですけどね、基本的に。無言で電話するわけにはいかないし、音楽だってヘッドホンしてても音は多少漏れますよ。狭い部屋に一緒にいれば」

「そうよね。でも、滋君からの訴えではそれが度を越えているっていうんだけど。本当のところはどうなの？」

「僕的には普通です。あいつの基準には適合してないみたいだけど」

「仲良くやっていくことって、無理そうかな？」

「あいつが我慢してくれれば大丈夫です。これ以上文句を言われるようなら、僕の方が部屋を変えて欲しいくらいですよ、京子姉さん」

まさに交渉決裂といった印象だ。どちらかの部屋を変えてやるしかないのだろうか。けれどそれはわがままではないか。他の参加者が同じようなことを言い出したらどうするのだろうか。そう考えると、京子はまだ結論が出せずにいた。

検討課題（予習用宿題）

- （１） 現地で特に授業を担当するわけでもない、京子のような引率者或いはコーディネーターにとって、引率期間中の大事な役割とはどのようなものでしょうか。
- （２） 噂の段階で京子は何らかの対処をすることは必要だったでしょうか。
- （３） また、もし京子が噂の段階で何らかの対処をしたと仮定すると、彼女のその行動はどのような結果を生んだでしょうか。
- （４） 二人の言い分を聞いた後、もしあなたが京子なら、どのように対処するでしょうか。
- （５） そしてその措置について、他の参加学生には引率者としてどのように説明するでしょうか。